

安心して

悩むことのできる社会へ

東京教区 芝組
安楽寺 住職

藤澤 克己



「世のなか安穩なれ」とおっしゃった親鸞聖人が、今の世の中をご覧になったら、どうお感じになるでしょうか。経済大国と言われて久しいものの、豊かな生活の実感がなかなか持てないのはどうしたことでしょう。

私は、自死(自殺)という「いのち」の問題に向き合う活動をしています。寺の住職を務めるかたわら『自殺対策に取り組む僧侶の会』という東京近郊の超宗派の僧侶仲間と一緒に手紙を使った相談活動などを行っています。

自死についての活動というと、多くの人が

「死にたい人を思い留まらせる活動です」とおっしゃいますが、実はそうではありません。意外かもしれませんが、そもそも「死にたい」と思っている人はいないからです。死にたいと言っている人の話をじっくり聴いてみると、「生きていくのがつらいので、死ぬしか他に道がない」と思い詰めている場合がほとんどです。「死にたい」と「生きていくのがつらい」とでは大きく違います。

さて、『浄土真宗の教章(私の歩む道)』の「宗門」という項には「心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する」と書いてあります。心地よい言葉ですからすんなりと入ってきますね。しかし、実際のところ「心豊かに生きる」とはどういうことでしょうか。

「苦あれば楽あり、楽あれば苦あり」と言われるように、人生には色々な場面があります。そのあらゆる場面をそのままに受け入れることができれば、それが「心豊かに生きる」ことに通じるのではないかと私は考えています。

しかし、楽しみや喜びはともかく、苦しみや悲しみをそのままに受け入れるのは難しいことでしょう。だからこそ「安心して悩むことのできる社会」が望まれます。

辛い気持ちを打ち明けることができ、周り

がそれを受け止めてくれる社会であれば、一人では抱えきれないような大きな苦しみや悲しみを少しは和らげてもらうことができ、辛い気持ちがそれ以上進行せず、しばらくして自信や生きる力を回復できると思うからです。苦しみや悲しみを分かち合えばこそ、楽しみや喜びも心から一緒に味わうことができるようになるでしょう。

こうして「安心して悩むことのできる社会」に生きることが、「心豊かに生きることのできる社会」につながると考えています。「世の中安穩なれ」とお示しいただいた親鸞聖人の願いに報いるようにしたいものです。